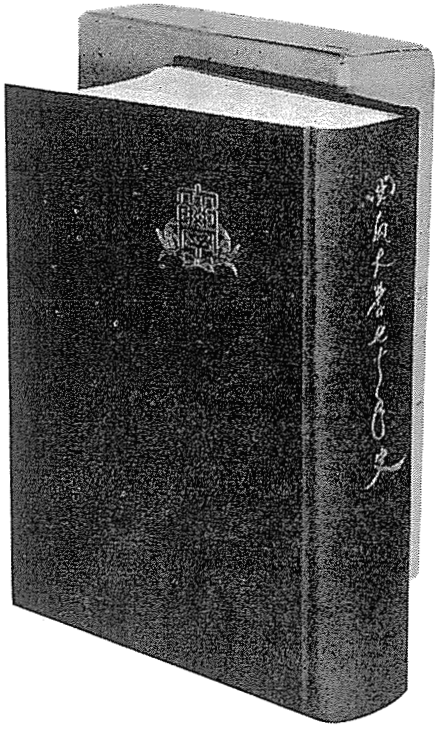
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Jan. 30th, 1958. No. 311.

關西大學學報

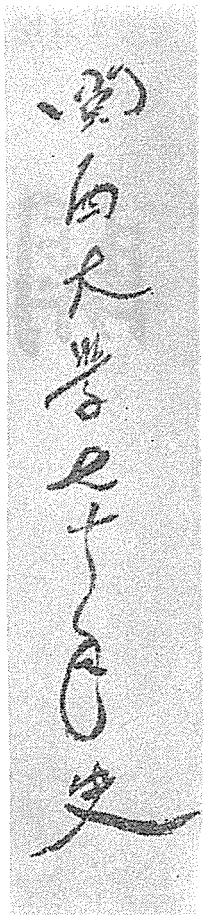
昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年一月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第三一一号

昭和33年1月　第311号



関西大学七十年史

關西大學學報局



吉朋川白長事理
(扉)筆題の生先

「関西大学七十年史」の完成に際して

矢口孝次郎

本学創立七十年を記念する諸事業の中、最も長い日子を費した「関西大学七十年史」も、漸く昨年末に至つて完成上梓された。その準備段階から数えて三年余の歳月をけみしたわけである。その三年余はまたたく間に流れ去つたが、いまその一本を手にして、その間の資料の蒐集・整理、成稿、検討、校正その他の経過をふりかえつてみると、苦心の三年であつたことをしみじみと感ずる。

さて、この七十年史は読む人それぞれの経歴や立場によつて、それぞれ異つた点に興味を感じて読んで頂けるものと思うが、編集者たちが編集上の主目標として始めに選んだところは、「あとがき」にも述べておいた通り、次のような三つの点であつた。第一は、本学の創立事情をでき得る限り詳しく且つ正確に伝えるということ、第二は、教育の実情並びに研究活動を詳説するということ、第三は、学生生活の記録を留めるということ、これである。しかし、第一の創立事情の究明ということも、ただそれだけのことに止まるのではなく、その後の歴史に関していえば、学校の経営組織の発展の問題、いいかえれば法人としての関西大学の発展の問題に連らなるものである。この点は、本史を構成する一つの側面として、大正・昭和の時代に至るまで詳しく跡づけられているのであつて、いわば、経営的側面からの関西大学の歴史ということができるであろう。また、第二の教育及び研究に関する側面は、いうまでもなく教育・研究の機関としての関西大学の歴史であつて、大学の歴史としては最も中心的な部分である。別ないい方をすれば、主体としては教職員、特に教授の立場に即した関西大学の歴史であるということができよう。その発展を通して、われわれは、ほとんど講師のみに頼つていた本学の教育スタッフが、昭和時代に至つて専任教授を中心とした本来の大学としての教育・研究のスタッフに発展してきた過程を、興味深く読みとることができる。第三の点は、学生生活の記録であるが、これは学生すなわち卒業生(校友)という立場からとり上げられている。特にスポーツの面などが大きくとり上げられているが、これは「あとがき」にも述べておいた通り、「スポーツは学生生活の華であり、卒業生にとつては最も追憶の多い面である」と考えられたからである。このように、大学を構成する三つの主体に即した発展を、いわば叙述の主律としつつ、でき得る限りの正しい史実の上に立つて、一つの歴史として構成したものがこの「七十年史」である。そのほか、本史には、今までに見られなかつた写真や資料が豊富に収録されている。それやこれやの諸点からみる時、この「七十年史」は本学に関する始めての歴史らしい歴史の記述であるといつても、自負に過ぎることはないであろうと信ずる。

しかし、それだけに、完成に至るまでの苦心は推察して頂けると思う。というのは、編集の当初、上述のような目標を定めたのであつたが、着手するについての拠りどころともいうべきものは、ほとんど見出されなかつたからである。なるほど、既に五十年史はあるにはあつた。しかし、それは史実の収録において不十分であり、また編集もやや一方に偏したものであつて、そこから出発して編集を進めることはできなかつた。また、一方資料らしいものは、古い時代についてはもちろん、新しい時代についても、本学の何処にも保存され整理されてはいなかつた。このようなわけで、編集の仕事は、各方面の資料の蒐集という、いわば修史の「いの一」から始めなければならなかつたのである。従つて、その間のすべての仕事を担当された横田教授及び補佐の薗田・原両専任講師の努力の並々ならぬものであつたことは推察にあまりある。またその間の事情は、本誌に寄せられた横田教授の追憶談の中に詳しくうかがうことができる。このような経過からみて、われわれは、修史者として、横田教授のような得難い人

を得たことを喜ぶとともに、三氏に対して心から敬意を表する次第である。

なお、右の事情に関連して、この機会に一言しておきたいことは、これも「あとがき」に述べておいたことであるが、次の八十年史、ないし百年史の編集はすでに始まつているということである。また歴史書の編集というものは、資料がなくては何ごとも始まらないということである。この点は横田教授が体験談に痛切に述べられている通りである。われわれ委員は、この機会に、過去についてはもちろん、将来に亘つても、本学関係の種々の資料を蒐集保存するための「関西大学・記念史料室」というようなものの設置を提言しておきたい。また併せて、関係者各位の御協力を望む次第である。

さて、成稿に至るまでの経過は、横田教授の追憶談に詳しく述べられている通りであるが、その後の原稿の検討は小委員会によつて行われた。その際、三島・神屋敷両委員とわたくしとが、各時期を分担して、原稿の一頁一頁を仔細に閲読して完璧を期した。またそれに応じて横田委員及び薗田氏によつて補正の筆が加えられ、羽野委員が整理に当るというようにして、一昨年の夏期休暇の終り頃に大部の原稿は漸く完成したのである。しかし、その後更に細部の補訂が行われ、原稿が印刷に廻わされたのは十一月のことであつた。

このような経過を経て、いまわれわれが手にするところの「関西大学七十年史」が完成された次第である。さて、最後にあげてまことに恐縮であるが、更に一つ述べておかねばならないことがある。それは本史編集上の画竜点晴ともいうべき題字のことであるが、そのことが議に上つた時、委員たちが一斉にあげた名前は白川朋吉先生の名前であつた。また、何人が考えても、本史の題字の執筆者としては、先生をおいて他に人は見出されないであろう。先生も心よくお引受けになり、見られるような美事な筆によつて本史編集の最後を飾つて頂くことになつたのである。

さていま、座右におかれた濃緑色八三〇頁の大冊子を眺めると、何としても、これだけのものは、多くの人々の直接関接の協力がなければ、決して生れ得なかつたであろうということを痛感する。われわれは、三年余に亘る重い責任を果し得た安堵の念にひたるとともに、御協力を得た学内学外の多数の方々に、改めて感謝の意を表する次第である。

（理事・経済学部教授・経博）

……

「七十年史」をかえりみて

三島律夫

かれこれ十年も前のことになる。千里山図書館の一室に参集を請われたことがあつた。集つた人は時の理事長宮島先生を中心に森川霜村、神屋敷、安井、羽野の諸君と僕とであつた。

新旧学報関係のメンバーで（当日欠席の遠藤君と、今は亡き辰巳君とが揃えば、歴代の主任が全部揃うわけである）懐旧談を中心に、学報今後のあり方について意見を求められたものであつた（学報昭和二十五年五月号参照）。

その時のことである。まことに打ちとけた懇談を機会に「創立七十年史」の編集計画をたてて、もうボツボツかからねば、これがとても大変な仕事だから……という話題を、神屋敷君が出して僕が合槌をうつたことがある。これが七十年史に関する意見交換の最初のものであつたのではなかろうか。

その後、任期満了による理事陣営の異動があつて、白川先生が理事長になられ、久井氏が専務理事に選ばれて、創立七十年記念事業が検討され初め、まことに豪壮な企画のもとに発足したのである（学報昭和三十年十一月記念号参照）。

やがて年史の編集委員が委嘱せられ、岩崎学長を委員長とする陣容は出来たが、さて執筆担当者に誰れを頼むか？が第一番の重要事であり且つ難関であつた。そこで白羽の矢を立てられたのが横田教授であつたが、多忙限りなき同氏が、よくもこんな大仕事を引受けられたものと委員一同が感銘にたえなかつたところである。

それまで殆んど没交渉であつた横田氏が、私の室へしばしば立寄つて、多少とも史料の提供を望まれたので、古いアルバムや雑誌や新聞などをほうり出して、御意のままにお預けした次第であつた。この時「預り証」を頂いたが、後になつてこんな書類が、一〇〇年史の時など、又史料になるのではないかと大切にしまい込んだことであつた。

このことについての後日ものがたりがある。学園騒動の新聞記事や、学生校友の決議文、声明書と写真などを提供したために「三島君、そんなものを出したら宮島先生に叱られるぞ……」とある委員から注意？を

うけたことがそれである。僕は「五十年史」の足らざるところに不満があるのと、学園の歴史と事情にあまり通暁せられない横田教授をお助けすることが、委員としての責務であると考えたほか、何等の他意がないので少しも気には止めなかつたが、むしろこんな事では完全な年史が出来るかどうかをあやぶんだものであつた。

五十年史は、恩師の小泉先生が草稿を執筆せられたので、同じ職員室にいた関係上私はその苦労や事情を知悉するものの一人であるが、時の主席理事であつた喜多村桂一郎氏が、一々丹念に朱筆を入れて補正せられたので、いわば理事会監修的なものになり、法律家型の行章にまとまつて行つたような憾みがあつた。今回はこれを繰返してはいけない。委員としてのわれわれの念願はここにあり、執筆者であり、歴史家である横田教授の方針も亦当然ここにあつた。

したがつてあり合せの資料を出し過ぎたなどというよりは、もつと文箱の底を探して、あれもこれも一応横田氏に提供すればよかつたという思い残しがある。

今度の年史には、学生生活の多方面な記録が集収せられたが、この中に指定洋服店の難波氏と米田氏の記事が乏しいことなどもその一つである。この両氏は僕の関甲入学（大正五年四月）当時から、殆んど毎日のように出入りし、その後夫々店主におさまつた訳であるが、文芸部と運動部に所属した学生諸君が物心両面のお世話になつた事は大変であつたように聞いている。特に難波氏が、各種運動部の選手にかけた温い後援と激励の数々は筆舌につくしがたく、見方によつては表彰と銅像もののようにいう校友さえある。

それは兎も角、こうした一つ一つに執筆者の不満があり、われわれ委員が不備を歎ずるものの、正直なところ予想したよりも立派な「関西大学七十年史」が出版せられたという喜びも禁ずることが出来ない。

年史についての所見を求められるまま、ここにいつわらざる私の感想を述べておく。

（関大第一高等学校長兼関大第一中学校長）

「関西大学七十年史」の編集を顧みて

横田　健一

一、武田宣英博士をしのぶ

昨臘大晦日に、「関西大学七十年史」が完成して送られてきた。手にとつて眺めながら、まづなによりも残念に思つたのは、この書の完成を最も心待ちにして下さつた武田宣英博士が、この書の成るわずか二カ月前に、八十八歳の高齢でなくなられ、書物は霊前にさげねばならなくなつたことであつた。ここに謹しんで哀悼の意を表し、あわせて刊行のおくれたことを、在天の霊に対しおわび申し上げる次第である。

一九五三年八月に理事会・編集委員会から私は七十年史執筆担当者として依嘱、任命され、九月より編集のしごとにかかつた。そのとき岩崎編集委員長からは、創立とその前後の事情については、特に念入りに調べるようにと申しわたされたのであつた。そのさい、第一回卒業生中の唯一の生存者として武田博士が湯河原に住んで居られることをうかがつたが、第一回生の内田重成翁が下関に在住されることは未だ学校当局にも知られていなかつた。同年十一月二十四日に私と修史補助にあたられた薗田香融氏（現文学部専任講師）の二人は、史学科学生を鎌倉・伊豆・静岡方面史蹟の修学旅行に引率・指導を終えて後、湯河原の武田邸へ参上した。大小の旅館がむれならぶ湯河原の渓谷は、また満山紅葉の季節であつた。温泉街を通りぬけ、バスの終点でおりて、なお数百メートルも急な石畳の坂をのぼりつめた右手の山腹に武田博士の瀟洒な別邸「新光荘」の数寄屋風の門があつた。この温泉郷の源泉地帯と自慢される四百坪の地を占め、西南に谷をへだて対岸の紅葉する峰々をのぞむ眺望のよい場所であつた。早速湯殿へ自ら案内されるなど、親切なおもてなしを頂き、夕刻まで詳しいお話を伺つたが、当時八十四歳の高齢とは思えぬ卓抜正確な記憶を有せられたのには感嘆した。

同博士はすでに本史にものべたように、創立者井上操の書生として居られ、明治十九年十一月四日に京町堀の願宗寺で開校最初の講義に出席した体験をもつ唯一の人である。下関の内田翁は翌二十年四月、河内町興正寺に学校が移つてから入学されたので、願宗寺時代、十九年十二月十三日より数カ月行われた淡路町の予章館時代は、武田博士以外に知る人はなかつたわけだ。武田博士は高知県の士族、もと上野良吾といい、卒業後母方が甲斐源氏の武田氏であるところから武田姓を名乗られ、甲斐源氏の祖は八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光であるところから、その別邸にも「新光荘」と名づけられたとの話であつた。この話からもわかるように、博士は明治初年の士族によくみられる古武士

的なおもかげを有して居られ、その点は下関の内田翁にも極めてよく似た風貌がみられた。両翁とも関西法律学校の学生時代を中心とする青少年時代の刻苦勉励、質素剛健な鍛錬の生活を物語られた。もつともそうした猛烈な克己的な勉強生活の体験をされたのは両翁のみではなく昨年なくなられた福岡の第三回生池田重吉翁（もと弁護士）、今も矍鑠として居られる第六回生野田文一郎翁（もと民政党代議士、神戸市長）はじめ古い時代の多くの卒業生の語られるところであつて、今日の学生諸君に耳の穴をほじつて聞いて貰いたいことが多かつた。その生活や勉強ぶりについては本史の興正寺時代をみて頂きたいと思う。

武田博士は内田翁や多くの初期卒業生同様本校卒業後、東京の和仏法律学校すなわち今の法政大学に進んだ。それは当時の関西法律学校が司法官に任用せられる資格を認められていなかつたからで、東京の五大私立法律学校（和仏、専修、明治、早稲田＝当時東京専門学校、中央＝当時東京法学院）はこれをみとめられていたのである。博士は和仏法律学校卒業に際し、式に臨まれた小松宮殿下より総代として賞状を受けられたように抜群の成績であつたが、なお自分の第一の母校は法政大学よりも関西大学だといつて居られた。私が史料蒐集のため、とくに本学創立者の一人であるとともに、法政大学の六人の創立者の一人である堀田正忠氏とその師ボァソナード博士の事蹟をしらべるために、一九五四年十月法政大学を訪れた際、法政大学当局においても、武田博士や内田翁は重要な校友としてよく承知して居られた（ここに改めて調査の便宜を与えられた法政大学当局の好意に対して謝意を表する）。だが武田博士は、自分の今日あることを得るは、全く関西大学の創立者井上操先生のおかげである、また関西法律学校は三年在学したに対し、法政は一年の在学であつたとて、むろん法政の為にもいろいろつくされたが、関西大学に対しては特に終生、社団法人時代の社員として、又その後も理事や監事として貢献され、昭和十四年には、自分の崇敬する和気清麿の絵図（今の第二学舎講堂にかかげる）を寄贈し、あるいは三千円の奨学資金（これは、三百年後の基金として信託預金とせられた、その記念碑は千里山図書館前にある）を寄贈するなどの寄与をせられた。また特に昭和三年「日本陪審法論」によつて学位を本学より受けられたが、東京に在住しながら、法政大学へ申請せずに、特に本学において学位を受けられたことからも、同博士の母校愛を知ることが出来るであろう。博士は、井上操氏が「自分は国費によつて司法省法学校明法寮で法律を学ぶことが出来たのだから、この国恩に報ずるために、大阪に法律学校をつくつて好学の青年を教えよう」とて本校を創立し、無報酬で熱心に教えられた話などを感激をもつて語られたのであるが、この話を明治大学史にしるされたボアソナード博士の言葉（本史一八頁参照）と思いあわすならば、本校創立の精神が那辺にあり、また、初期の学生達が、そうした講師達の純粋な奉仕的精神より出た法学教育の熱意を、どんなに強い感銘をもつて受けとつていたかを知ることができよう。

内容の一部（245頁）

武田博士のお宅へは二十九年十月、三十年五月とその後二回お伺いし、その卓抜な記憶力によつて初期の講師達のおもかげや、初期の学生生活を詳細に知ることができた。博士も七十年史の成果を待ちわびて居られたのに、あと僅かというところでお目にかけられなくなつたのは、私達の編集が予定より遅れた為であると誠に申訳なく思つている。在天の博士の霊はしかし、母校の発展を莞爾として見守つて居られることであろう。博士の思い出話は「風樹の記」とその改題再版「山荘四季の夢」にのせられているから参照されたい。なお本史第一章・第二章は博士の談話にもとづくことが少くない。あわせてみていただきたい。

二、初期の史料採訪

武田博士とともに深い感銘を受けたのは、下関鳥町（小月駅下車）に在住される内田重成翁を訪問して、回顧談を承まわつたことであつた。特に数十冊におよぶ

関西法律学校時代の筆記ノートは、初期講師たちの講義をうかがうに足るのみでなく、明治法典の大半が成立する以前の、日本の法律学のありさまや水準を知る手がかりとなる。中には面白い引例や冗談・挿話の類まで筆記してあつて、法学部の方々にとつては興味深い資料であろう。なお第二回生（卒業せず中退）蔵内静三郎氏のノートが、令息阪大文学部教授数太氏（豊津公務員アパートに居住）が所蔵されていて、ともに貴重な文献である。蔵内氏の所蔵品中には、内田翁の方にない「関西法律学校講義録」「関西法律学校筆授生講義録」等印刷出版された講義録類が数冊ふくまれている。幸い内田翁はノートとそれを筆記された矢立、墨壺をも本学園書館に寄贈され、長く後進への激励の資とされた。全学友諸氏と共に謝意を表したい。蔵内氏の所蔵される品々も父君の思い出として貴重に扱われているものであろうが、将来は本学へ譲つて頂いたら有難いと思うのは筆者のみではなかろう。内田翁のところでみせて頂いた写真の中に、創立者小倉久氏の経営される天満の私塾「友愛館」の塾生八人の記念撮影があつたことも私たちを雀躍させた。塾での講義は余り行われなかつた由であるが、勉強の猛烈さについては本史に紹介した通りである。内田翁紹介の労をとられ、また明治三十年代の様子を話して頂いた下関校友会支部長岡本勲治氏に対して厚くお礼申上げたい。

第三回生池田重吉、第六回生野田文一郎両翁のところへは昭和二十九年三月に参上回顧談をうかがつた。池田翁もまた本史の完成をみずになくなられた。哀悼の念をささげる。両翁とも学校時代に苦学力行された体験を語つて頂いたが、講師達についてはもう一つ明確な記憶をもたれなかつたようであつた。なお現理事長白川朋吉先生は野田翁よりややあとの在学で、明治二十七・八年頃の思い出をきかせて頂いた。この時代について最も明確かつ豊富な憶い出を記憶され、かつ記録されているのは明治三十年第九回卒業の松山藤雄翁であつて、細字でぎつしりかかれた数十枚の手記はこの上もない好資料だつた。同氏は在学中すでに事務員として勤務され、卒業後副幹事となり、明治末年に大阪市役所へ転出するまで、明治二十七年より十数年間、興正寺、江戸堀、福島初期の時代を身をもつて体験した方である。編集開始後も神屋敷氏蔵委員を通じて、多くの手記によつて教示を賜わり、とくに本史七八―九頁にのせた興正寺平面図は貴重な材料である。なお神屋敷委員は編集各方面に配慮され、原稿の校閲などにも無理せられたためか、昨秋来病臥されている。この機会に同氏の御指導、高配に謝するとともに、一刻も早く全快されるよう祈ります。明治時代についてはその以後の時代とてもそうだが、いろいろお伺いしたい校友の方々も居られたけれども、何分にも私も教職と研究の傍らの編集であり、史料蒐集期間が、僅か一年半であるため、出張する暇がなく重要な校友を逸したことが少くないのは申訳なく思つている。興正寺・江戸堀時代については内藤正剛・岡本勲治両翁を訪問申上ていろいろ伺つたが、もつとお尋ねしたい方も多かつたのに行けず残念である。この機会に提言したいことは、明治二十年代卒業の校友は皆八十三・四歳以上で、僅か数名しか残つて居られず、三十年代卒業の校友の方々も高齢であつて、百年史の編集まで生きていて頂くことはほとんど期待し難い。それで今のうちに明治時代卒業の方々の回想をもう一度記録にとどめる座談会なり、出張筆記なりを行うとともに、御所蔵のノート、書籍・写真類を徹底的に蒐集することが必要だということである。これはむろん、大正年代についても、未だ余裕はあるにしても、やつておいた方がよいことはいうまでもない。詳細明確な記憶力を有して居られる方は多くの校友の中でも、やはりある特定の方であり、そうした人を見つけ出すことが大切である。いわんやノート、書籍・書翰・雑誌・アルバムとなると、戦災で失われた人、また長年の間に処分したり失つたり、置場所を失念されることも少くないので、なるべく早く手を打つた方がよい。

今回の編集にあたり、史料貸与方を学報や新聞紙上で再三広告し、また公用の席上でもお願いをし、校友の方々のところへ手紙でお願いしたこともあつたが、ほとんど効果がなかつた。本人のお宅へ参上し、これについての記録なり、写真なりをお持ちならば貸して頂きたいと懇請し、探して頂いてやつて手に入れ、複製をつくるという手続をとつたのである。本史編集のため、校友その他新聞社、学校、図書館等を訪問し、史料採訪出張を行うこと、約三十回に及んだのであるが、多忙な教務をかかえているものとして、一年半の間に、編集のため、老大な記録書類を通読して抜き書きを作製する余暇に出る回数としては限度に近かつた。それでもいろいろ欠陥も多いので、怠けているとの各方面のお叱りを受けることも甘受する覚悟である。

なお、創立者堀田正忠氏令息正昭氏（前外務省条約局長駐伊大使）は父君青年時代の写真を貸与され、思出を語つていただいた。桂忠雄経理局長よりは、御縁戚にあたられる第三回卒業生であり、四十八年にわたつて本学の幹事・関甲校長等を歴任された垂水善太郎氏の残された多数の文書を貸与せられた。その中には初期より大正年代にわたる多数の講師・校友等の書翰をふくみ、中でも第一章にアートでかかげた明治十九年十月

十四日付初代校長小倉久、校主吉田一士より名誉校員土居通夫宛借用証や、創立者志方鍛の創立事情について語つた手紙（大正元年のもの）などは、創立について未だ知られなかつた極めて重要な新事実を物語るものであつた。その多数の他の書翰については、充分な研究をとげていないことを告白せざるを得ないが、有田徳一校長のなくなられた年月が従来誤られていたのを正すことができたことや、福島時代の旧校歌作者池辺義象の作歌に関する手紙など校友諸氏にとつても興味があろう。また桂氏のスクラップ・ブツク二冊も大正から昭和初年時代にかけてのもので、昭和二年、五年のストライキ、八年のハンスト等の重要な史料を提供された。また大正三年の母校改善運動ストの史料は三島律夫一高・一中校長より提供して頂いた。三島先生の所蔵される福島時代の雑誌類も、編集中千里山図書館の架蔵に帰した関西学報とともに、福島時代について、五十年史の空白部分（昭和十一年につくられた五十年史では明治四十年より、大正八年頃に至る十余年間がほとんどブランクでほとんど何もしるされていない）をみたすにあずかつて力があつた、ありがたく思う。初期以来福島時代の写真については、垂水善太郎氏の令息唯一氏が、多少の欠があるとはいえほとんど毎年の卒業記念写真を所蔵せられていて、これは学校当局にもないものが非常に多く、編集にあたつた我々を雀躍せしめたのである。垂水氏に対して、また同氏紹介の労をとられた一高の下島先生に対し謝意を表したい。

以上のように申しのべて来たことからもお分りのように、学校当局や図書館には、本学の毎回の卒業記念写真や学校の出版雑誌類すら非常に少なく、今回の編集では、その入手に苦心した。これは近代についてもそうであつて、学報のごときでさえも終戦頃の分が、千里山・天六両図書館ともなく、副委員長矢口教授御所蔵のものによつて、みることができた。とくに甚しいのは「関西大学新聞」「関西大学学友新聞」その他の新聞類であつて、学校には一切なく、これまた矢口教授の保存された昭和九年四月以降のもの（欠号も少くないが）によつて僅に空白をみたしえた。各運動部・文化部発行の雑誌やパンフレット、「千里山文学」その他の文芸サークル誌等もほとんど入手しえず閉口した。これは各部・会が発行しても狭い内輪の中だけに少数配布し、学内の他のものは、いつどんな雑誌が出たのかわからず、その少数があるいは戦災にあい、また各人によつて早く廃棄されてしまうなどのことが多かつたからであろう。今後は、一部はぜひ千里山・天六両図書館に御寄贈願いたいものである。昭和時代のものについては河村宜介教授からいろいろ貸していただいた。

三、学生生活の史料と記述、その他

前回の五十年史が、その編集記述の重点を、学校の経営や法規の変遷に置いていたので、今回は、足らなかつた大学の研究面と、それに学生生活の記述を補うこと、とくに関大を天下に有名ならしめたスポーツについて記述しようというのが、一つの目標であつた。古い先輩方には学生生活について詳しくお話をうかがうように努めた。スポーツについては国際級の選手であつた方々を訪問しお話しをきくことにした。しかしなにぶんにも編者である私自身が全くの書斉人であつて、スポーツのことが全然わからない人間である。お恥しい話を告白するが、関大に奉職すること十余年、関関戦を、一度しか応援に行つたことがなく、いわんや他のスポーツの応援はおろか、何もみたことがなく、また大学祭や文化祭もほとんどみたことがないという人間である。それが学生生活について書こうというのであるから無謀というものであつた。だが五十年史には一行もしるしていないスポーツをとにかく書こう思い立つたことだけでもみとめて頂きたい。しかし全くの無知なので、誰がえらい選手なのやら、いざ史料を集めにかかつても、記述にあたつても各スポーツのルールなどについても一切わからず、非常に困惑した。したがつて記述にはいろいろ不足の点や間違い、その他の欠点も多いと思うが、右のような事情であることを御諒察願いたい。他の私立大学の歴史をみても、スポーツで有名な大学でもスポーツやその他学生生活の記述が研究面のそれとともに非常に乏しい。これは概ね編集記述にあたる人が、理事や学校の首脳部などの人々で、自分達の直接関心をもつ経営面に重点をおくからだろう。また編集に歴史の教授があたる場合も多いようであるが、私どものように根つからの書斉人が多いらしく、スポーツへの関心が皆乏しいようにみうけられた。国立大学の編纂した歴史をみると、国家の保護があるので経営はほとんど苦労がないからであらうか、経営史というものが非常に少ない。また学生生活の記述も少く、研究部門の記述が非常に多い。そうした点は私大の歴史と著しく異る点である。総じて各大学の歴史を一見すると、その大学の性格や経済的・学問的な実力、編集者の地位や能力、関心のあり方、努力の程度、手の抜いてある箇所などが一目瞭然とする。それだけに編集者としては全くおそろしいような気がする。経済的に恵まれた大学、優秀な設備をどんどんつくり、すぐれた研究が多く輩出し

て、立派な業績を次から次へと出している大学の歴史記述など、淡々とかかれていても、紙面の底から光がにじみ出て、うらやましい気がするものである。

さてスポーツについては岸源左衛門、大島鎌吉、戸上研之、玉江和男、倉光安峯、川村善之、高木秀玄、河村宜介、飯田正一、杉原四郎、山口辰雄、松葉徳三郎の諸氏から写真や談話、原稿、雑誌などをよせて頂き大変ありがたく思っている。もっと多くの校友をおたづねして話を伺いたいと思ったのであるが、前にのべたようにスポーツについてはめくら同様の筆者で、誰についてうかがえばよいのかもよく分らなかったのであり、また暇もなかった。

福島時代以来については明治三十九年以来五十年の長きにわたり講師をしていられる小川忠蔵先生を河村信一先生と共に訪問して一夕お話をきくことが出来たのは愉快だった。福島末期については福岡校友会支部長清原俊之助氏にお話をうかがい、アルバムを拝借した。千里山初期については岩崎委員長、前理事長宮島綱男、前教授水谷揆一、同学歌作者服部嘉香、前理事春原源太郎諸先生をはじめ現役長老の諸教授方（芳名は略させて頂きます）からお話をうかがった。宮島先生からは総理事山岡順太郎氏について一日中ゆっくりお話をうかがったことや、服部嘉香氏から巧みな話ぶりで千里山時代のロマンチックなエピソードを教えられたことなども思い出深い。昭和時代に入ってからのことは現在の古参の先生方や職員方の殆んど全部の方々からは、折にふれて懐旧談をしていただきたい、中にはアルバムを貸与せられ、手記をよせられた方もあって、一々芳名をここにしるさないけれども、ここに改めて厚く御礼を申上る次第であります。なおまた統計表その他の資料の調達作製に秘書課・経理局・校友課・出版課・図書館はじめ各部課において多大の御協力を賜わりましたことも感謝に堪えません。これまた一々しるして御礼申上るべき処、略させて頂きます。終に前の五十年史編纂者小泉幸治先生が一昨年なくなられ、このたびの書をお目にかけられないことも残念なことで、哀悼の意を表します。小泉先生へ紹介案内の労をとられた飯田正一教授にもお礼を申上たい。全般の写真については校友佐々木写真館主佐々木豊明氏の立派な写真多数にあわせ、古い写真の複製にも技術を発揮して頂き、またナニワ写真工房主須古勝次氏（故織田万氏親戚）にも口絵写真などいろいろお世話になった。かつ写真に造詣深い田中一郎秘書課長、羽野堅二出版課長にも協力していただき、小史のレイアウトその他に毎日新聞社前写真部長林信夫氏（編集委員）、同氏の御紹介の高橋清見氏の御指導御援助を得たことも大きい。

最後に岩崎委員長以下編集委員皆様の絶大な御指導、御教示に併せて、編集に多大の費用を要したにも拘らず、自由にやらせて下さった理事会の御理解とくに久井専務理事の御厚意、苦労を共にせられた原英次氏、薗田香融氏（同氏は最も時間のかかる浄書、校正、年表、資料の修正に全面的努力された）また最後まで出版について万般の配慮をされた出版課長羽野堅二氏はじめ同課加藤智子氏には御礼の申上ようもありません。申し忘れましたが小史を印刷された大阪高速印刷株式会社、本史を印刷された内外印刷株式会社にも御礼申上ます。

（教授・文学部）

印刷、製本について

羽野堅二

昨年十二月末「関西大学七十年史」の完成本を手にした時、ほっとした。その時の偽らない気持である。

原稿が編集委員会から出版部に廻附され、京都の内外印刷株式会社に手渡したのは、昭和三十一年の十一月であったから、約一カ年余を要したことになる。勿論、その間に、新しく発見された資料や史実を追補したり、また改稿したり、是非収録して置きたいというものを挿入したりしたため組版工程において相当手間取ったことは事実である。

兎も角、本学が創立七十周年記念式典の盛儀を挙行したことを後世に遺す唯一つの記録文献たる意味において、印刷、製本等に万遺憾なきを期し、他のこの種文献と比べて遜色のないものを刊行したいとは、編集委員会の抱負であり、また希望でもあった。蓋し、出

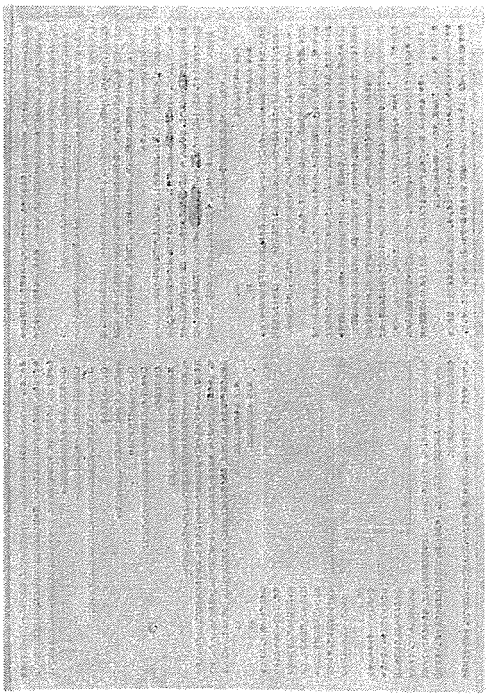
来上つた書物は、のそ当時の大学の、あらゆる面における、規模と活動状況とを反映する、成長指数のようなものであるからであろう。ために、出版部としては予算の許す範囲において最高の上製本にしようと努力したのであるが、専門家が見られてなお不備な点は、すべてその掌にあたつた私の未熟のいたすところで、御宥恕の程お願いしたい。

さて、扉と背表紙の「関西大学七十年史」という題簽は理事長白川朋吉先生の揮毫になるものである。表表紙右上の校章は昭和三十年十一月新調された校旗を写真模写した正規のもので、稍々大き過ぎるのではないかとの感を抱かせるが、金版の関係上葦の葉脈を明瞭にするため止むを得なかつた。なお、これら題簽と校章とは共に金版彫刻箔押、本金使用である。

表紙は日本クロス製バクラム濃藍（Book Wing）、芯干注黄板紙二八オンスを用い、見返しは、外国の大学史に創立当時の写真を表紙裏に、現況の写真を裏表紙裏に使用している巧みな着想（例えば、The University of North Carolina 1900-1930, 1957参照）や、あるいは、本年史印刷過程中に内外印刷で印刷した「岩国市史」には市田五郎画伯の錦帯橋の風景画が、また「大分市史」は福田平八郎画伯のつくしの静物画が、極めて効果的に用いられているのなどを比較検討してみたが、苟くも大学の年史たる限り気品を保たなければならないとおもつて、これらの構想を避け、梅幸茶の美術紙大礼紙鳥ノ子を用い、これに上質紙一二〇ポンドを貼り合せて加工した。

扉には、さらに越前天上紙水玉（手漉）のライス扉を添附し、本扉は鳥ノ子白口（手漉）を用いて題簽を凸版印刷した。題簽の凸版化にあたつては墨蹟のかすれたところまであらわすため、二三回作り直すなど腐心した。

原色刷は現在千里山学園の航空写真で、三菱特アート両面A版一〇〇ポンドに、ネガ着色による原色四度刷とし、台紙は鳥ノ子赤口（手漉）である。



紙　型（407～410頁）

巻頭口絵には創立七十周年紀念式典の盛儀をトップに置き、学園の現況を示す写真を配し、三菱特アート両面に網目版二度刷として光沢をもたせている。

本文紙は本洲製紙の製品であるが、銘柄ではなく、別注文別漉で、淡クリーム上質A版五五ポンドである。使用活字は主として九ポイントで、八ポイント、六ポイントを併用している。また、本文中の挿画は、ネガのない古い写真が多いため、相当修正を加え、網目版凸版とした。

各章小扉は見返しと同様、大礼紙鳥ノ子茶（手漉）を用い、各章の写真も三菱特アート網目版である。

折込みの学園配置図は、GHAオフセット二度刷とした。

製本は糸綴り上製本テープ綴じとし、外函はボール二四オンス盆蒲鉾付、ビクトリア刷である。

また、大学史編集を機に各方面から蒐集された史料を保存する記念館の設けられることあらば、その飾り壁紙として本年史の紙型を用いてはとの考慮から、ドライマットの紙型がとられている。

九〇〇頁にも及ぶ大冊の「関西大学七十年史」が刊行されたことは、これみな、後世に遺すよう万般配慮せられた前及現理事会並びに編集委員の方々の大学愛の結晶というべく、将来、必ずや大学発展の一礎石となるであろう。なおまた、三十八年間の印刷経験に基く優れた技術を傾注し、美術品創作にも似た意欲をもつて本書の完成に努力された内外印刷株式会社の人々の本学に寄せられた厚意に深く感謝の意を表する。

*

兎も角、「大学史は古くから殆んど大学祝典を機に研究され、記述されている。……大学史の鏡に映して一般史、就中精神史、文化史、学問史の優れた一班が見られる」（Herbert Grundmann, Vom Ursprung der Universität im Mittelalter, 1957, S.1）といわれる通り、本学の七十年史がまた、後世、わが国文化並びに文教興隆の一時代史を知るよすがとなるであろう。

（大学出版部職員）

学内報

評議員会互礼会

評議員会互礼会は、年始交礼の為、一月二十五日（土）午後三時より天六学舎において開催された。

出席者（敬称略、イロハ順）

明石三郎　阿部甚吉　池田信之助　今井康兼　岩佐清三郎　浦野健二郎　越智比古市　大小島真二　大島武夫　岡野蔀士　樫本信雄　桂忠雄　門上敏夫　神宅賀寿恵　寒川喜一　河村宣介　河野稔　小林巌　佐伯五郎　白川朋吉　関豊馬　千巌克郎　寺西武　中務平吉　長尾昇　長柄金吾　浪江源治　西尾専太郎　西本寛一　野間秀泉　東浦栄一　久井忠雄　平井三朗　深川実　福島四郎　藤野春三　本多喜慶　堀正人　松原藤由　松村睦鴻　水谷揆一　宮崎平　村尾静明　村上精三　森寛紹　矢口孝次郎　保井剛一　矢野文雄　山崎敬義　横田健一　渡辺正人

「関西大学七十年史」完成・刊行

昭和三十年十一月四日本学創立七十周年記念式典を祝する創立七十周年記念事業の一環として計画された「関西大学七十年史」は、史料蒐集、修史に約三カ年、印刷製本に約一カ年を要して、漸く昨年十二月末完成、刊行されるにいたった。これをもって記念事業のすべてが終了したことになる。

なお、同史は本文七〇〇頁、資料篇（図表を含む）一五四頁、口絵五七頁、特クロス、本金使用、美装函入である。

新年交礼会

一月六日（月）午前十時より、理事長、学長はじめ大学関係者の新年交礼会が恒例の通り行われた。

入学試験施行

昭和三十三年度一部一次入学試験は一月十五日、本学（千里山学舎）並びに高松、福岡、広島、金沢、名古屋、札幌の六地方試験地に於いて十時より一斉に行われた。全国大学入学試験のトップに当り多数の志願者が受験したが、合格者の発表は一月二十五日に行はれた。

人事異動

昭和三十二年十一月十七日付
学校法人関西大学助手規定第八条により任期満了になるも同条及び第三条により再任を命ずる
助手　谷沢永一

昭和三十二年十一月二十五日付
任期満了につき学生部長代理を解く
教授　明石三郎
教授　植野郁太

昭和三十二年十一月三十日付
願により職を解く
助手　東郷富規子

昭和三十二年十二月十六日付
任期満了につき大学院部長を解く
教授　矢口孝次郎

昭和三十二年十二月十七日付
大学院部長を命ずる
教授　魚澄惣五郎

昭和三十二年十二月二十四日付
工学部長事務取扱兼務を命ずる
学長　岩崎卯一

昭和三十三年一月一日付
本大学教授に任じ文学部勤務を命ずる
藤田新三郎

昭和三十三年一月十一日付
任期満了につき大学院経済学研究科幹事を解く
教授　鋳方貞亮

昭和三十三年一月十二日付
大学院経済学研究科幹事を命ずる
教授　三谷友吉

昭和三十三年一月十四日付
関西大学職員任免規定第十八条により職を解く
第一高等学校名誉校長　矢口家治

（11頁より続く）
て師走の夜を過したが、かつての応援団長長谷川氏が関大応援歌のリードをとりつづいて沢山氏も学歌の指揮をとった。最後に藤野氏の発声で昭七会万才を唱え盛会のうちに再会を約し解散した。

出席者
丸山喜三造、越智比古市、大畑源治、吉村治一郎、猪飼永太郎、吉木由雄、佐々木正本、鎌田嘉之、筒井園義、浦野健二郎、沢田英一、沢山勝、図師親徳、原良人、岩佐治三郎、稲垣安吉、森田満茂、米田恒治、藤原忠義、飯森秀心、松葉徳三郎、京本善英、行後喬、林安弘、前田純田中、渡辺治明、長谷川。

景波会

昭和八年、本学の教職員で組織されて以来相互の親睦を誓って今日にいたっている景波会（名誉教授・故藤沢章次郎氏が命名）では十二月二十六日（木）午後六時半から、天五「大阪屋別館」で久しぶりの会合を行った。これは忘年会をかねた親睦の宴で小雨にもかかわらず岩崎学長も来賓として出席した。

出席者十七氏のうち松広氏は遠隔地からはるばる馳せ参じたという熱心さで、ともに昔をしのび、今を語って旧交を温め一同なごやかに歓談のうちに九時すぎ別れを惜みつつ散会した。

出席者
来賓…岩崎学長
会員…綴野信一郎、池田信之助、尾崎信夫、逢阪勝見、桂忠雄、鎌田嘉之、神吉等、木島倫三、里見復二、谷岡登、土橋四三、西脇吉幸、古本宗作、山本順応、安井章吾、谷口宗一、松広寿衛。

校友バッチ

校友

校友会本部の動き

十二月

九　日　代議員銓衡委員会・午後六時、天六学舎

十四日　広報部会・午後六時、鐘紡西寮

十四日　代議員銓衡委員会・午後三時、天六学舎評議員室

十五日　広報部、機関紙「関大」三十一号発行

十九日　会則改正委員会・午後六時、天六理事会議室

廿一日　代議員会・午後三時、天六学舎四十二教室

廿六日　組織部会、午後六時、グリル「絹笠」

廿八日　常議員銓衡委員会・午前十一時天六評議員室

十二月は校友総会を終えたあと残された役員改選で本部は多忙を極めた。まず代議員銓衡委員は校友総会の席上、議長から指名されたが、中務平吉氏を委員長とする委員会が十二月九日開かれ、検討を加えた結果、七〇五名の新代議員が決定した。

も一つは同じく総会席上議決権を付託されて、代議員会で検討されることになつた会則改正問題であるが、これも紆余曲折を経て次の通り改められた。

第六条

会員は会費を納めなければならない。

会費は次の二種とする。

一、終身会費金参千円

二、年会費金参百円

但し年会費は毎年六月末日までに納めなければならない。新入会員は入会と同時に入会金参百円を納めなければならない。

また新任代議員から互選によつて選ばれる常議員は阿部甚吉、大島武夫、西村治三郎、村上精三、山崎敬義の五氏が銓衡委員となつて審議することになつた。

代議員会

新しく選出された代議員による初の代議員会が、十二月二十一日（土）午後三時から天六学舎二階四十二教室で開催された。この日は新代議員二百余名が出席する盛況で坂本氏が司会、大月会長が議長で始められ、まず会長の挨拶、祝電披露があり、中務平吉代議員銓衡委員長が代議員銓衡経過並びに結果を報告した。

そのあと会則は前記の通り議決改正し常議員銓衡も議長指名の銓衡委員で審議決定することを可決、議長から前記五氏が指名された。

このあと久井専務理事から大学事情の説明があつて午後五時四十分無事散会した。

芦屋支部

発足して十五年目を迎えた芦屋支部では十二月一日（日）午後五時から芦屋市大原町「竹園」で総会を開催。当日は学校側から久井専務、校友会から大月会長が出席したほか、神戸支部からも山崎支部長、向井副支部長らが参加した。

会は藤原幹事長のあいさつで始められ田辺支部長が支部が生れてここに十五周年を迎えたことを喜び、さらに今後の支部強化と飛躍すべきことを強調した。

そのあと藤原幹事長から過去一年の業務・活動の経過報告、山村会計から会計報告があり、それぞれ承認された。つづいて支部長が今後の事業計画をのべ、全員これに賛成した。

来賓各氏の祝辞、各氏からの祝電の披露があり、万才三唱を最後に総会を終えた。

ひきつづき懇親会に入つたが、和気あいあいのうちに時をすごし八時半散会した。

出席者

来賓…久井専務理事、大月校友会会長、山崎神戸支部長、向井同副支部長、竹谷同副支部長。

会員…武田蔵之助、前田軍治、田辺由治郎、山村鶴千代、藤原仁、加藤信之介、立花達蔵、畑本哲也、井上清、行俊喬、天井作次、高田晴年。

大阪市役所支部

本庁、分局、区役所など合せて六百名にあまる会員をもつ大阪市役所支部では十二月十三日（金）午後六時から森の宮「市立労働会館」三階大広間で昭和三十二年最後の幹事会を開いた。

これは忘年会をかねて行われ、支部長村上精三氏ほか各ブロックから四十数名の役員が集り、まず支部長が校友活動や支部の活躍を回顧、そのあと経過報告があり議事に入つた。

議事は①支部事務局組織の検討②会費徴集の方策③会員の慶弔方法④次期総会開催の時期などを審議した。

つづいて忘年の宴に移り、すきやき鍋をかこんでよもやま話に花が咲き、職場にある同窓の近況、母校工学部の設置構想、千里山の外苑に弾丸道路が貫通する問題などのトピックスに耳を傾け、あるいは最近の母校はみごとな外観とともに内容にも充実をきたした点などを語りあい午後八時半などやかに散会した。

昭七会

昭七会では十二月十七日（火）大阪・南の「いろは」で忘年会を開催。

学園を去つて、はや二十五年になるという同窓が久しぶりの参集とあつて話題はつきず、なかには実社会の堪難立身の志の足跡か、頭髪のなかに白きの混るものもちらほら…。

学園にあつた青春の日日を懐しみ感無量といつた光景もみられた。

母校を語り、旧友をしのび、時を忘れ

（10頁下段へ）

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年一月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學學報　第三一一號　一月號

編集兼発行人　久井忠雄

発行所　關西大學出版部
大阪市大淀区長柄中通二丁目
電話堀川(35)二〇七二番
振替大阪二六七二番

關西大學学生募集

昭和33年度

大学院　修士課程　法学・文学・経済学各研究科
博士課程　法学・文学・経済学各研究科

課程別	願書受付期間	試験日
修士課程・博士課程	3月1日～3月22日	3月26日・27日

学部　（第一部＝昼間・第二部＝夜間）

法学部　法律学科・政治学科
経済学部　経済学科
文学部　英文・国文・哲学・仏文・独文・史学・新聞・東洋文学の各学科
商学部　商学科
（新設）工学部（第一部のみ）機械・電気・化学・金属の各工学科

部別	願書受付期間	試験日
法・商（第一部・第二部）	2月1日～3月6日	3月9日
経・文（第一部・第二部）	2月1日～3月7日	3月10日
（新設）工（第一部）	2月1日～3月6日	3月8日・9日

第一高等学校・**第一中学校**

学校別	願書受付期間	試験日
一高	2月21日～3月3日	3月5日・6日
一中	3月1日～3月10日	3月11日・12日

入学案内　大学院・学部（要66円送料共）　關西大學庶務課宛　吹田市千里山又は大阪市大淀区長柄
高・中（要58円送料共）　高等学校・中学校各教務課宛　吹田市垂水一四四

「關西大學七十年史」は、関西大学創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、編集に、遺憾なきを期して着々進められていましたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。

本年史御希望の方には実費金壱千五百円（送料共）にて御頒布いたしますから何卒、大学出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱　關西大學出版部

關西大學七十年史

A5判　本文　七〇〇頁　特製上質紙使用
資料編　一五四頁　布クロース美装
口絵　五七頁　函入

内容目次

第一章　関西法律学校の創業
第二章　河内町興正寺時代
第三章　江戸堀時代
第四章　福島時代
第五章　福島、千里山時代
第六章　千里山及天六時代
第七章　新制大学の時代
資料編　（関西大学七十年史年表その他）

刊行　關西大學